

名前(国内所属校)：祝迫直子（広島県立高宮高等学校）

現地勤務先：インドネシア共和国 スラウェシ島 南スラウェシ州 ジェネポント県教育局 学校外教育課

H21年4月19日～H21年7月14日の出来事，活動の様子

Selamat(スラマツト)

インドネシア語で、「安寧な，安全な，平和な」という意味です。
いろんな言葉と組み合わせるとつかえます。

H21年7月14日作成 第5号

広島県立高宮高等学校 地理歴史・公民科教諭 祝迫直子

青年海外協力隊（JOCV）

H20年度 第1次隊

任国 インドネシア

職種 青少年活動

スラマツト シアン
広島県の皆さん，Selamat siang!（インドネシア語で「こんにちは」の意味です）

私は広島県立高宮高等学校の祝迫直子です。平成20年度より現職教員特別参加制度で青年海外協力隊へ参加しています。昨年6月23日にインドネシアへ渡航して早1年が過ぎました。任地ジェネポント県教育局へ8月5日に赴任し，11か月が過ぎたところです。第5号である今回は，私が識字教室での活動に至る経緯と実施している活動についてお話しします。

1 JICA（独立行政法人国際協力機構）の要請内容

JICAの青年海外協力隊へ応募する時は，あらかじめ要請のある職種の活動内容等を確認してから受験します。職種の中には，「小学校教諭」や「理数科教師」という教員の職種もありました。日本で特にその免許を持っていなくても受験可能でしたが，私はできれば幅広い教育活動をしたいと思い，「青少年活動」にトライしました。「青少年活動」の資格条件は，「社会経験」でした。そして，私はインドネシアでは初めての青少年活動隊員となりました。主な活動内容は，「識字教育の普及活動」です。

2 活動に至るまでに

前回，第4号で識字教室のお話をしました。私は最初，私の活動は巡回型隊員として識字教室を巡回し，指導している先生方に，より効果的な指導方法を教えたりすることだと思っていました。

県の教育局は私の家から歩いて通える職場ですが，夕方に開かれる識字教室は村の中にあるため，交通手段が必要です。他の職員は，一般的な交通手段であるオートバイで通っていますが，インドネシアの青年海外協力隊は安全重視で，オートバイに乗ることが禁止されているのです。そのため，私は最初の5か月は，教育局や他の職員が自動車で回る時に便乗させていただいたり，別の仕事で自動車が村に入る時に一緒についていくようにしていました。併せて，家の近くでできる自主活動（空手教室・日本語教室）は毎日夕方に行っていました。

ある時，年に1回行われる「識字の日の祭典」のため，全職員が都市マカッサルへ出張することがありました。そこで知り合ったのが現在のカウンターパートです。彼女は公務員ではありませんが，彼女の管理している識字教室は，私の家から公共の乗り物であるペテペテ（乗合バス）で行くことができる所があると教えていただいたのです。これをきっかけに，遠方ではありましたが，長い付き合いになるPKBM BAJI ATI（識字教室の名前）へ行くこととなり，そしてもう一人，そこで教える指導者とも出会い，私のもう一人のカウンターパートになっていただいたのです。

3 ライフスキルの向上をめざして

その識字教室は、ある程度インドネシア語を読み・書きできる人たちのクラスでした。そのため、できれば生活のための収入を向上させるために手に職をつけるような時間も増やしていきたいとのことでした。しかし、識字教室のライフスキルのためのテキストは、昔からジェネポントで作られている「ドドロ」というお菓子の作り方だけでした。楽しい実習の時間にはなりますが、完成品を高く売ることができるわけでもなく、自分たちで食すだけで、収入を向上させるものではありませんでした。そういう時に、私が所属している環境教育分科会の方で、スラバヤでコンポスト（堆肥肥料）作りの講習会があるとの連絡を受けたのです。カウンターパートにこのことを相談した時、識字教室のメンバーは全員が農民だから、より安価で土にいい肥料ができるなら、それは新しいライフスキルになるとの前向きな返事をいただきました。そして2人のカウンターパートとともに、コンポスト作りを学びに行きました。

（写真上は識字教室でテキストを読むお母さん達，写真下はドドロ作りを行っている様子）

4 コンポスト作り講習会

スラバヤで魔法のバケツと呼ばれる「高倉籠」を見本として頂いて帰ってきました。ここから2か月半かけて、種菌を増殖しなければなりませんでした。完成する日に講習会をやってみようということになりました。

種菌の増殖は、カウンターパートに担当していただき、私は当日使う教材等を準備することにしました。準備段階では、スラバヤと同じ材料がないとコンポストを作ることができない、魔法のバケツと特別な土はスラバヤにしかない、だからジェネポントではできないという意見もありましたが、たとえ同じものは使えなくても、失敗してもいいから、ジェネポント版のコンポストを作ろうという意見にまとまりました。

実際の講習会では、参加した識字教室のお母さん方はすごく熱心で、嬉しそうでした。チームを作り、その代表者は種菌作りを、他のメンバーは台所の野菜くずを代表者の家に持っていき、2か月半後コンポスト作りに協力したメンバーで、完成した堆肥肥料を分けるという仕組みにしました。

また、材料がないからできないという準備段階での意見も踏まえて、もし材料がなかった時にどうするかを、参加者全員で考える時間を毎回とることにしました。

その後もひと月に1回ペースで出前講習会を実施しています。質のよい肥料作りをめざして、そしてわかりやすい教え方ができるように、毎回反省しながら少しずつ改善していっています。ひと口に講習会を開くといっても、それまでに行う準備や交渉事はたくさんあります。まだまだインドネシア語がつかない私ですが、私の周りにはたくさんのインドネシア人の方々のおかげで、ようやく一つ一つの活動を行うことができるのだと実感しているところです。

（写真上：スラバヤでのコンポスト講習会で学ぶカウンターパート達，前にある青い物体が「高倉籠」，写真中：コンポストを使った土，使わない土に分けて，成長を比較するために，2つのポットにトマトを植えてみる。写真下：コンポスト作り講習会2回目（5月18日）参加者とともに）

